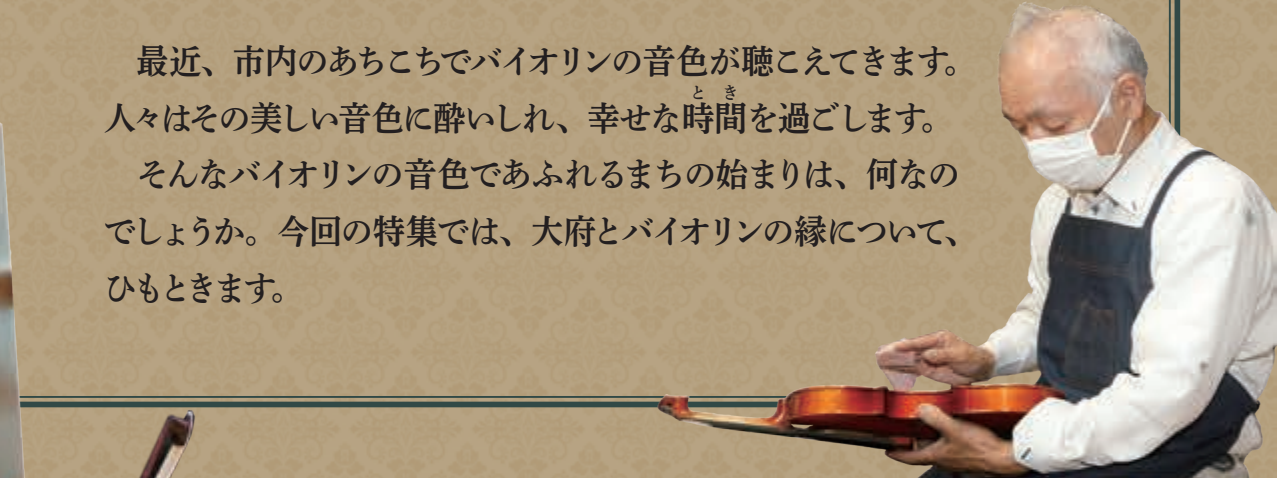




バイオリンの音色があふれるまちに ～ 鈴木政吉の思いを紡ぐ ～

最近、市内のあちこちでバイオリンの音色が聴こえてきます。
人々はその美しい音色に酔いしれ、幸せな時間を過ごします。
そんなバイオリンの音色であふれるまちの始まりは、何なの
でしょうか。今回の特集では、大府とバイオリンの縁について、
ひもときます。



大府とバイオリンの深い関わり

明治期に日本で初めてバイオリンの量産化に成功した鈴木バイオリン製造(株)は、昭和10年、大府に分工場を構えました。創業者・鈴木政吉は、分工場に隣接する研究所で、バイオリンの音色の研究に没頭していました。

そして、現在。

大府の地から誕生したバイオリニストは、ある者は世界の舞台で観衆を魅了し続け、ある者は大府をイメージした曲を生み出しました。

これは偶然なのか、それとも必然なのか。

過去から現在に続く五線譜の上で、一つ一つ奏でられていたバイオリンの音が、今、鮮やかな音色を響かせようとしています。

和製バイオリンのパイオニア



日本人で最初の世界的に知られるバイオリン製作者である鈴木政吉。その職人人生は、明治20年、初めて見たバイオリンに魅了されてから幕を開けます。

政吉は初めて見たバイオリンを参考に、見よう見まねで自作のバイオリン第1号を完成させます。その後も製作を続け、その物珍しさから注文も舞い込み、同年、名古屋に鈴木バイオリン会社を創業します。

念願の大量生産のはじまり

明治23年、本格的にバイオリン製作を始めた政吉。製作したバイオリンは、シカゴ万国博覧会(写真左)など、国内外の博覧会で数々の賞を受賞し、国際的に高い評価を受けます。



明治33年には、バイオリン頭部の自動削り機を考案・完成。さらに2年後には、甲削機(バイオリンの表板と裏板に丸みを持たせる加工をする機械)を発明します。この発明を機に、念願であったバイオリンの大量生産を開始。政吉は、大正時代には従業員千人を抱え、毎日500本ものバイオリンを生産する世界的楽器メーカーへと成長させます。



バイオリン製作に生涯を捧げる

しかし、世界恐慌や外国製の安価な楽器の登場などの影響を受け、徐々に経営が悪化。昭和16年に、政吉の長男である梅雄が社長に就任し、会社再建を図ります。梅雄はドイツの楽器生産の村「マルクノイキルヘン」に倣い、バイオリンの里を実現するため、現在の横根町名高山に分工場を新設。分工場の隣には、バイオリンの音色の研究をするための済韻研究所も建てら

れ、政吉はここで、バイオリン製作に一生を捧げます。

昭和19年、政吉は大府に築こうとした「バイオリンの里」への思いを持ったまま、84歳で生涯の幕を閉じました。

大府へと受け継がれた情熱

鈴木バイオリン製造(株)は、大府市へ本社を移転するための費用をクラウドファンディングで調達し、令和3年に名古屋から大府市へと本社を移転しました。

新社屋には、スズキ・メソッドの教室が入り、子どもたちがバイオリンの腕を磨いています。また、バイオリンの裾野を広げるため、職人が市内の小・中学校に出向き、楽器職人の仕事を紹介しているほか、工房見学・製作体験を受け入れるなど地道に活動が続けています。

鈴木政吉の胸像の帰還

鈴木政吉の功績をたたえ、昭和15年に胸像が建立されました。当初は横根町の分工場内にありましたが、戦禍を免れるため、昭和20年に大府を離れました。

令和3年、本社が大府市に移転したことをきっかけに、鈴木バイオリン製造(株)から市に寄贈され、76年ぶりに大府に帰ってきました。



参考文献：鈴木バイオリン製造(株)ウェブサイト

Interview

大部分が手作業 職人の技術が光る楽器 城阪英功さん

20年間、バイオリンの製作に携わっていますが、今でも難しいと感じます。材料となる木は生き物なので、同じ物は存在しません。そこをいかに工夫して美しい音が出せるようにするか、一つ一つの材料と向き合いながら製作しています。さらに、バイオリンは芸術性の高い楽器です。特に、バイオリン表面のf字孔は、匠の技が求められます。鉛筆で線を引いてから削りますが、線通りに削ればいいという単純なものではありません。鉛筆の線は、あくまでも目安。最終的には、職人の経験と目で納得できるよう仕上げます。バイオリンは、いかにこだわりを持って作るかがとても大切です。



響き渡る美しい音色

大府みどり公園の雄大な自然の中で行われた
野外クラシックコンサート。

室内のホールで行うコンサートとは打って変わって、
明るい秋空に、

美しいバイオリンの音色が伸びやかに響き渡りました。

日本では見慣れないこの光景も、

弦楽器の本場ドイツでは、

鑑賞ツアーが組まれるほど、人気の催しの一つ。

緑に囲まれて最高の音楽を聴くという体験は、

訪れた観客にとって、夢のようなひとときになりました。

今、大府では、

バイオリンを活用したまちづくりが進んでいます。

日本のバイオリン王・鈴木政吉はかつて、

大府の地をドイツのマルクノイキルヘンに倣い、

「日本の『バイオリンの里』にしたい」と夢見ていました。

政吉の胸像が76年の時を経て、大府に帰還したことを契機に、

政吉が描いた「バイオリンの里」が

今、大府で築かれようとしています。



バイオリンを楽しむ



バイオリン/フィドル 音楽の休日 2022を開催

秋の気持ち良い空の下で、バイオリンなどの弦楽器をもっと身近に感じてもらうと企画した野外音楽フェスティバル。ジャズやフォークソングなど、プロ・アマ問わずたくさんの音楽家たちが、あいち健康の森公園などに集結し、目線の近いステージで、観客は弦楽器の音色を楽しみました。

一日でさまざまなジャンルの音楽が楽しめる

このイベントでは、演奏するジャンルは自由で、バイオリンだけではなく、アコースティックの弦楽器を使っているバンドも歓迎し、より多くの方々が楽しめる仕掛けを施しました。このようなイベントは、全国的に見てもとても珍しいと思います。

今後は、市内のさまざまな場所でこのようなイベントを展開できたらいいなと思っています。大府に来ると何かしらの音が聞こえてくる、楽器を持って大府に来ると、どこかしらで演奏できるというように、音楽であふれているまちになるとうれしいです。

市産業振興アドバイザー
林正実



バイオリンを使った 音楽教育を開始

40丁のバイオリンを市が用意し、北山小学校の4年生を対象に、バイオリンを使った音楽教育を行いました。講師としてスズキ・メソッドの伊藤達哉先生を招き、親切・丁寧な指導で、子どもたちは『きらきら星』が弾けるようになりました。来年度は、市内全小学校で行う予定です。

北山小4年生 立澤奏多さん



いろいろな音が出て楽しい

最初は音を出すのが難しかったけど、先生に教えてもらいながら練習したら、弾けるようになりました。弦が4本あって、いろいろな音を出せるところが面白かったです。

バイオリンの楽しさをもっとたくさんの人にも知ってほしいなと思いました。次は、『きらきら星』以外の曲も弾けるようにになりたいです。

子どもの感性を育む

たくさんのバイオリンが机の上に整然と並んだ教室に入ってきた時、子どもたちの目がとても輝いて見えました。

本物の楽器に触れ、「音の響きがきれいだな」「こうやって練習すると曲ができるんだな」と体験することは、子どもたちの感性を育てる意味でとても良い機会になりました。

音楽教師 早川育子先生



大府みどり公園で クラシックコンサートを開催

大府みどり公園で、1200人もの大観衆の中、市で初めて野外クラシックコンサートを行いました。弦楽器による野外コンサートは、日本では珍しく、自然と調和したバイオリンの音色に、会場は大いに盛り上がりました。

鈴木バイオリンカルテット
伊藤達哉さん



プロの音色を堪能できる 小学校訪問コンサートを開催

大府・大東・神田小学校の4～6年生を対象に、バイオリニストの水野紗希さんによる小学校訪問コンサートを行いました。水野さんは3年間で市内全小学校を訪問する予定で、子どもたちは小学生のうちにプロのバイオリニストの生演奏を聴くことができます。

大東小6年生 和波蒼真さん



大府の雄大さが伝わった

体育館全体にバイオリンの音色が広がっていて、とても感動しました。自然豊かな大府を表現した市公式イメージ曲『HABATAKI』のゆったりとしたメロディーを聴いて、大府の雄大さが伝わりました。なかなか生のバイオリンの音を聴く機会はないので、とてもうれしかったです。

バイオリンに触れてみたい

初めてバイオリンの演奏を聴きました。バイオリンの音色は、激しい曲と穏やかな曲とで少しずつ違っていて、とても美しかったです。バイオリンに触れたことがないので、一度バイオリンに触れてみたいと思いましたし、私も曲を弾いてみたいと思いました。

大東小6年生 池田優里さん



Third Movement 第三楽章

バイオリンの里へ 今、歩き出す

「日本のバイオリン作りの文化を残したい」。

この思いで、今年、「バイオリンを学び・楽しみ・知る」取り組みが始まりました。偶然が偶然を呼び、鈴木政吉の胸像が76年ぶりに大府に帰還した、大府とバイオリンの関係。これは、政吉の描いた「バイオリンの里」の概念が呼んだ必然かもしれません。

政吉がバイオリンの量産化に成功した昭和期から始まる「旋律の楽譜」には、まだ続きがあります。

「バイオリンの里」の実現に向け、大府の第三楽章が今、始まっています。

国内にとどまらず、世界へ 「バイオリンの里」大府の良さを発信したい

日本全国を見渡しても、これだけ積極的にバイオリン関連の企画が行われている自治体はないのではないのでしょうか。野外クラシックコンサートの開催や小学校でのバイオリン授業の実施など、大府市は音楽を楽しめるまちだと思い、すごく誇りに感じました。

私は、全国・世界各地での演奏活動のほか、現在スズキ・メソードの特別講師もしていますが、みんなが必ずしも将来バイオリニストになるという目的で習っているわけではないと思っています。しかし、一つのことを学ぶ・磨く精神は、どの世界でも自分のことを高めていくために大切なことです。必ずや、他のことにも生きていきます。

私は、「バイオリンの里」大府から世界に向けて音楽を発信できるよう、チェリストの佐藤桂菜さんやピアニストの進藤実優さんなどの大府の才能豊かな若い演奏家や、国際的なアーティストも交えた音楽祭をつくり、たくさんの方々と音楽の喜びをシェアできる日を夢に描いています。

バイオリンの音色が響き渡る大府で、 特別な時間を過ごしてほしい

学校訪問コンサートという新企画により、子どもたちの前で演奏する機会をいただき、感謝しています。母校の北山小学校では、実際にバイオリンを使った音楽教育をしたと聞きました。子どもたちが生の音や楽器に触れる機会はなかなかないので、とても貴重なことだと思います。この経験を一つのきっかけにして、自分の好きなことをどんどん見つけてほしいです。そして、いろいろなことに挑戦して、自分の能力が発揮できるような大人になってほしいと思います。

大府みどり公園で開催された野外クラシックコンサートでも、多くの皆さんの前で演奏させてもらいました。野外でのクラシック演奏は非常に珍しく、市民の皆さんがふらっと行く公園で演奏ができたことは、とてもうれしかったです。バイオリンと深い縁のある大府で、特別な時間を過ごしてもらえるよう、今後も皆さんの前で演奏し続けていきたいです。

バイオリンを知る

バイオリンの 工房見学・製作体験を開始

鈴木バイオリン製造㈱の本社工房を特別に公開し、貴重な資料やバイオリンの製作工程の見学会を行いました。他にも「ジブリパークのある愛知への旅」のツアーに製作体験が選ばれ、ジブリパークの開園後、全国各地からバイオリンの製作現場を一目見たいと予約が殺到しています。

初めて知ることがたくさん

小学2年生 阿久沢映翔^{えいと}さん

3歳の頃から、バイオリンを習っています。今回は、バイオリンの中身がどうなっているのか、どのように作られているのかを知りたいと思って、製作体験に参加しました。

普段当たり前のように使っているバイオリンですが、いろいろな人の手が加わって、長い時間をかけて作られていることが分かったので、もっと大切に使うと思いました。



アインシュタインからの手紙 レプリカ作成・展示

歴史民俗資料館で、アインシュタインが鈴木政吉に宛てた手紙のレプリカを公開しました。大正15年、政吉はアインシュタインに鈴木バイオリン製造㈱のバイオリンを贈り、アインシュタインは、それに対する

お礼を手紙にしたためました。

◀テレビ東京系列「開運! なんでも鑑定団」で手紙が鑑定され、1500万円の鑑定額が付きました。



公立保育園で バイオリン音楽会を開催

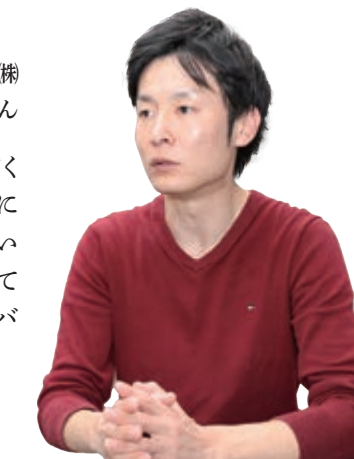
柗山・桃山保育園で、バイオリン音楽会を行いました。園児は、鈴木バイオリン製造㈱の小野田祐真社長が奏でる生のバイオリン演奏に興味津々。バイオリンを実際に手に取ると、くまなく観察し「4本の弦の太さが違うこと」を発見する姿も。園児は歌ったり、手拍子したりして、楽しい時間を過ごしました。



実際に触れて、バイオリンを身近に感じてほしい

今まで市内外問わず、300人以上の方が工房見学に来てくれました。夏休みは多くの子どもたちが来てくれて、職人に熱心に質問していました。ジブリパークの開園を機に始めた製作体験では、バイオリンの駒にニスを塗ったり、職人のアドバイスを受けながら実際にバイオリンの甲材を削ったりできます。バイオリンというどうしてもハードルが高いイメージを持ちやすいと思いますが、実際に触れてみて、身近な楽器に感じてもらいたいです。製作途中のバイオリンを見る機会はなかなかないと思います。鈴木政吉が思い描いた「バイオリンの里」を、我々現代の職人の手でつくっていかれたらと思います。

鈴木バイオリン製造㈱
代表取締役社長 小野田祐真さん



子春澤



小野 紗希